

故郷の雨

淡路島雑感

門

康彦

目次

故郷の雨 淡路島雑感

故郷の雨 9

故郷淡路を想う 15

亡母 門ミユキの想い出 17

老人の世界 21

正義について 23

淡路島の将来を創造しよう 25

視点見直し、志は高く 27

あとがき 29

故郷の雨

故郷の雨 淡路島雑感

混沌があつた

宇宙の広がり存在を

ひとりになって

とめどない疲れがあつた

静寂の淵を

襲いくる目眩や

避けえぬ嘔吐の衝動をになって

沈黙がゆつくりと

どこまでも沈んでいった

あれは遠い日

果てしなきデカダンの雨

降りし日

ひたひたと倦怠の足音

響きし日

沈潜の彼方

不明瞭な空間に

それらひとつひとつを見失い

怒りが彼方から

音もなく近づいてくる

今日この日

悲しみが通りすぎ

さみしさがゆく

ただ一度

本当のことを言うために

疲れと倦怠のなか

故郷の雨 淡路島雑感

暗闇の沈潜に思いをさせ

過ぎし日しのぶ

今日

恥辱の里に

しとしとと

幻の雨が降る

少年

砂塵の彼方

めくるめく深淵が

そうだというのか

海原の向こう

とめどない宇宙が

そうだというのか

ふかいあさ 創刊号

廃屋の傍に立ち

降りしきる雨を

すかして眺めれば

笹百合の咲く谷間

雨の中

右手に食べかけの果実

左手を風にひらひら翻えさせて

少女が見えた

俺のものだったか

お前のものだったか

あるいは少女のものだったか

誰が知ろう

怒りが怒りをはらんで

昨日を生んだ

あれは果てしない

少年達の乱舞だったか

疎水の流れに秋深く

漂よう落ち葉が

そうだというのか

乾いた歩道に流星ひとつ

舞う残り火が

そうだというのか

今また

さわやかな一条の沈黙が

暮れる藍色の景色に

語りかけ

引かれゆく船人さながら

様々な相克の影に

夢を見る

枯れた大平原や

白い海

赤い山々

微かなかすかな

死者の子守唄が流れる異国の地

それが

そうだといいのか

ひとりひとりの

虚妄の乱舞が

あれほどまでに唄いあげた

あれは ひととき

少年達の乱舞だったか

故郷淡路を想う

行間の密度と言葉が在る。書かれている言葉よりもその言葉の裏の意味、また言葉と言葉の間、何も書かれていない空間に在る凝縮された意味とも解釈されている。

時は三十数年前、所は京都、銀閣寺から哲学の小径を経て南禅寺、西下した鴨川の三条河原で学生とやくざの乱闘事件が有った。祭りの宵で双方三十数名が入り乱れての派手な喧嘩で機動隊まで出動したが、当初、劣勢であつた字生が勢いを取り戻してからの反撃は見事なものであつたが、その要因は作戦にあつた。三条大橋から駆けつけるやくざに対して、一旦、御池大橋まで退却し態勢を立て直して迎撃したのであつたが、一人の先輩だけ下がらずに向かつて行った者が居た。当然、怪我は大きく誤解の遺恨が残つた。病院で彼は何も語らなかつたが、仲間が逃げたという思いをずっと持ち続けていた。一方、組織だつて行動しやくざを蹴ちらした仲間達は、彼の行動に批判的であつた。

何年か後の再会時に、ある意味での誤解は解けたのだが、その日以来、私は「川の流
れは兩岸から見なければならぬ」という事に留意している。派手なパフォーマンスで
突っ込んで行った方が、冷静な情勢判断で下がった方が、答えの正解は無い。

それぞれの価値観で、見る方角で、視界が全く違う時がある。川の流れは、まさに黙
して語らぬ行間の密度そのものにも見える。

さて、淡路島は鳴門と明石海峡の架橋そして本土導水により、物理的に島でなくなり、
過疎、少子、高齢化の加速する地域です。過疎、少子、高齢化を敵視する視点もあるが
それを逆手にとつて未来を創造する方法も有り、量を質に変え高める事により展開を開
く事が可能です。冷徹な分析と冷静な作戦、そして高い志が必要です。

故郷淡路の喫緊の課題、市町合併は、シジフォスの神話に似ている。誤解が誤解を生み
混沌模倣としている。私の合併についての意見に「局長の意見は悲観論」と言う人がい
る。相手を懐で受け止める余裕が感じられない。人間が犠礼として動物と違う特質であ
る挨拶が出来ない人がいる。さらに自分と意見の違う人には、意識的な無視をする。寂し
い文化である。今こそ多様な視点と価値観、そして断固たる決意をする時であり、淡路
の近い未来は今の行動にかかっている。高い志と、思いやりの行動を持たねばならない。

亡母 門三ユキの思い出

——淡路地区婦人共励協議会創立50周年記念誌——

昭和三十年代、志筑に三島座という映画館があつた。母は映画好きで娯楽が少なかった当時、私も連れられてよく行ったものだが、ある時、幼少の私には、無頼漢かヤクザにしか見えなかつた男達が喧嘩を始めた。すると母がその喧嘩に割って入り、見事に収めたのを鮮明に覚えている。

何年か経ち、その事を姉に尋ねた事がある。「お母さんは、保健婦や共励会の世話で沢山の人の知っているから」という返事であつたが、共励会が母子家庭の会である事を知つたのは随分経つてからであつた。

当時、平家の落人の里、秘境といわれた徳島県の祖谷有瀬村から母は、大阪に働きに出た。今から、七十数年前の事である。徒歩、汽車、船、バス、現在の交通事情を考え

れば信じられない時間をかけての旅であつたらう。

今は地続きになつた淡路島の実家に、神戸の家から一時間もかからずに帰る事が出来る。移動時間の短縮と価値観の変化。その多様性を思つにつれ、母が当時としては随分、自立した女性であつた事を最近、再認識している。

父の死の意味は、既に自我が芽生えていた姉のものと、生まれて一年の私のものではまったく違つていたと思つ。

私は母子家庭を意識した事は全く無かつた。それは今から思えば、故郷の人情、時代、親戚、友人達そして何よりも母の愛情によつて守られていたものである事を不惑の年を遙かに越えた今、痛切に思つ。

昭和三十九年の春、大学進学のため出かける私に小雨降る志筑のバス停留所で、傘をさす事も忘れ、

「何になつてもいいが、ヤクザにだけはなるな」と真剣な眼差しで言つた母の澄んだ眼と小さな体が今も目に焼きついている。

母の眼の色が深く澄んだのを特別に意識したのは、小遣い銭を盗み、それを私が認めない事を叱り、「一緒に死のう」と日本刀で追いかけられた時と、私の妻が淡路から遠い唐津から来る事に難色をしめした親戚の人に毅然として妻を庇つた時であつた。

矜持と助け合い、そして正義。母が共励会に抱いていたものはまさにそれらであつた

と今でも思っている。

小学校から高校まで、ずっと優等生で大学も自力で奨学生になり、国立大学に進学した姉とは違い、大きな夢だけを抱く少年が私学に進学するのを助けてくれたのは、母が配慮してくれていた母子家庭の奨学金であったがこれも知ったのは卒業後の事であった。

大学在学中の私の素行を心配して、ちゃんちゃんこに小さな姪を背負い、津名高校の職員室を訪れ、相談に来た時の事を、藤本晃先生から

「あの時のお母さんには凄い存在感があった」と聞かされた事がある。

神戸の街で助産婦をして一人頑張っていた女性、明石の街で「おふくろ」という食べ物屋で働いていた女性達、楽よりも子供と一緒に苦勞する道を選んだ女性、それらの人達の存在感同質のものであったと思う。

当時の共励会には、そうした気概というか資質のムードがあった。

母が死んだ時、私は県庁の財政課に居たのだが、私が門ミユキの息子と知って全く面識の無かった職員の方が沢山、挨拶に来られたのには驚いた。

「貴方のお母さんは本当に世話好きな人よ」

とよく言われたものだが、折に触れその意味を実感したのは母の死後の方が多かった。共励会の本質もお互いが世話をしあうという事であったと思う。

女性が強くなつたと言われる今日においても、それは変わらないはずである。

父親どころか母親も親戚も定かでは無い子供たちを招いての昼食会で、挨拶の時に見せた母の涙が何であつたのか。

時代は変わつても人は変わらない。表面上は違つて見えても、本質を知る人間には真実は一つである。

共に苦しみ、助け励ましあふ自然な心。それらが自然体としてあつた時代。母が生きたのはそうした時代の共励会であつた。

夢の架け橋がかかり、高速道路が島の中央を縦貫し、関西国際空港の国際便が上空を飛び交う今、久しぶりに母のアルバムを開いて見た。元気に楽しそうに笑顔が映える婦人達の顔があつた。その回りに古着ではあるが洗濯の行き届いた白いシャツを着て、これも楽しそうに笑顔を見せている子供達の姿が在つた。

決して裕福では無かつたが、楽しかつた共励会。それが母の時代であつた。

老人の世界

二〇一〇年平成二十二年、私は六十四才になる。

二〇〇六年平成十八年の三月三十一日、今の制度で行けば兵庫県を退職する。

その、二〇一〇年をピークにして人口は減少に向かうと予測されている。

そして二〇二五年頃には、生産年齢人（十五～六十四才）の半分近くに六十五才以上の人口がなるとも予測されている。その時私は、七十九才。

日本の一般社会生活を今の制度の延長で維持していくためには、少なくとも六十五才以上の老人達の内の二十五%、四分の一程度の人達が何らかの形で自活しなければなら
ない。

人の世話になる恥を受け入れ惨めに生き続けるか、毅然として死を迎えるまで生きるか、これは美学の問題である。

人はいずれ老化する。その時、どう老化するか。例えば、顔に出来る皺。それは、笑顔の皺でなければならぬ。そして、何よりもその姿勢、爽やかでなければならぬ。心身とも健全でなければ、それは達成出来ない。そのためには、今の積み重ねが重要な事となる。

かつて、淡路島出身の代議士原健三郎は失言問題で労働大臣を棒に振った事がある。『怠けていると最後は老人ホームに行かなければならない』言葉の前後を通して理解を要する言葉なのだが、その言葉だけを利用され、老人を屈辱していると非難されたのだが、一面の真理を突いている。

若い時に好き勝手をして生きてきて、面倒を見てもらうのが当然といった態度。生活保護を受けずに頑張る態度。どちらも多寡が人生における人の生き方ではあるが、意味が全く違う。頑張った人にはそれなりの評価が必要であり、てきとうな人には、てきとうな評価が似合っている。

そうならない為に、日頃からの研鑽が必要なのである。
老人にも生きざまがあり、何よりも美学が必要である。

正義について

——阪神淡路大震災始末記異聞——

あまりにも偽の正義が巷に氾濫している。

例えば、阪神淡路大震災の悲劇の中で、脚光を浴びた「仮設住宅」の問題。勿論、それぞれにとって大変な状況の中で、必要な事であつたし、施策としても避けて通れない命題でもあつた。その事自体を問題にしているのでは無い。

その期間と入居者の心に問題があつた。

仮設はあくまで仮設であつて、速やかに入居者は自身の責任において、自分の住居を確保しなければならぬし、また、そのように努力しなければならない。普通の人達は、そのようにしそして、努力もした。

しかし中に、努力もしなければ意識の中において、「世話をしてもらうのが当然」とい

う人達がいた。そしてそれらの言動を論さなければならぬはずのマスコミが表面的な記事により擁護し、あるいはおだて、全てそんな人達が困るのは回りの所為だと煽り続けた。その結果、誰かが何とかしてくれなければ何処へも行けない。してくれないのは、行政の責任、といった自己責任放棄の無責任な態度がまかり通る始末になってしまった。挙句の果てが、退去時、誰一人として「有難う」と言う言葉が発せられなかったという、常識では考えられないような幕引きが演出される事になってしまった。

或は、報道されなかった。

そんな事は無い、と言う人がそう言うこと必ず出てくるが、新聞、テレビ、いずれを見聞きしても、退去時、白分達の不幸が長引いたのは誰かの責任であるという文句の表明はあっても、人間としての最低限のモラル、「有難う」という一秒もかからぬ言葉が聞かれた事は皆無であった。

因みに、仮設住宅にかかった費用は、不特定多数の人々から集まった税金である。

正義とは、少なくとも常識の枠内にあってしかも、川の流れの兩岸から見た視点を持った物でなければならない。

淡路島の将来を創造しよう

——「こころ豊かな人づくり500人委員淡路連絡会」に寄せて——

かつて淡路島に国際空港建設の計画があつた。それを放棄した代わりに、今の静けさと過疎、少子、高齢化を手に入れた。計画が実行されていけば、架橋も早く鉄道も建設され、さらには、淡路島は国際の島として発展していた可能性は高い。空港に反対した人々が今、過疎化を問題視している。何をかいわんやであるが、正解は無く、現実だけがある。

視点を狭少に固定してはいけない。「川の流れを両岸から見る」視点と、柔軟な発想を求めなければならない。「公園島淡路」だけで良いのか。言葉のイメージで本質を見誤つてはいけない。目的を明確にして、そのアイデンティティーから自分達の為すべき事を決定する。その感性がなければ、日本の美学の再生はあり得ない。行動を伴わない口先

だけの論議が氾濫している現代日本は、何かが狂い始めている。まず自分自身の存在から問い直す事が大事である。そうした謙虚さから人づくりの一步が始まる。

今、淡路島は、その将来の方向を決める時期に遭遇しています。正解は無いが、決して未知との遭遇ではありません。五〇〇人委員会の断固たる行動を期待しています。

10号 平成33年11月

視点見直し、志は高く

淡路島が物理的に島で無くなった今日、島という概念をどう止揚するのか、新たな組織の出発にあたり、知事が示されたように、「志高く」ありたい。今までの仕事の方法、視点を否定するのではなく、別の視点、角度から仕事の方法、価値を見直す。それには何よりも、地域住民の意見をよく聞き、組織の和と強化を図り、過渡期の時代の、未来の淡路島地域のあり方について、島民の立場から、明確な指針と指標を模索し、故郷淡路に貢献したい。

淡路島は面積五百九十五平方キロメートル県土の七・一%でシンガポールとよく比較されるが、人口は昭和二十年の二十三万人をピークに減り続け、現在十六万人を切っている。高齢化、少子化が進んでいる。

気候は温暖、伝統、郷土文化を尊重する風土に恵まれている。口調は総じて荒っぽい

が、義理人情に厚く、何よりも礼節を重んじる。実態を知った人々が最近、島に転居している。

川の流れば兩岸から見なければならぬという故事に学び、過ぎたる気概を持つことなく、静かに前向きに生きる。

津名町志筑出身、二十七年ぶりのふるさと勤務。それゆえ地元は歓迎ムード。熱烈さは際だっている。

「二十七年の空白を嘗めたらいけない。教えてもらうという姿勢をもちたい」と冷静且つ絶妙なバランス感覚で抱負。「土日、夜昼なし。小さな街の寄り合いにも出たい」とも。「人付き合いは丁寧。部下思いで知られる」と評される一方、「逆境に強い」と頼れる存在でもある。

関大哲学科を卒業後、「詩」を志す。「文藝淡路」創刊号に作品を見ることが出来る。が、実母の意見に従い公務員の道を選んだ。

無類の読書家。月に十五冊、早読みと自称。「ファジーが大事、日本人の美学」と笑い飛ばす。筋力トレを欠かさない。文武両道の手腕に期待は尽きない。

議会ジャーナル 平成14年7月

あとがき

平成十三年四月一日の早朝、淡路県民局への赴任辞令も未受領のまま、洲本港棧橋に、関西国際空港のアクセスライン「パールライン」の出航式に立ち会ってから、瞬く間に、二年が過ぎ去りました。

故郷淡路の歴史の節目に遭遇した運命と、一期一会の不可思議さを楽しみながら、初めての単身赴任の生活を享受する毎日でした。

自分自身の節目に、二年間の思いを、これまでの雑文などをとりまとめ友人達と情報共有をする為に、市町村合併については別の日としてこのメッセージを贈ります。

武闘派の看板を下ろし、「心は少年」の矜持だけは持ち続けるよう努力はしています
が、人生の寂しさを感じるようにもなりました。

皆様へのご厚情に感謝し、さらなるご活躍を祈念するとともに、友情の共感が地域作りとして華開かん事を期待しています。

淡路県民局長
門康彦 拝

平成15年春

かどやすひこ
門康彦

昭和21年2月24日生まれ

出身地 兵庫県淡路島津名町

昭和39年3月 津名高等学校卒業

昭和43年3月 関西大学卒業

昭和43年から 三原高校 淡路教育事務所 教育委員会 財政課勤務

昭和59年4月 農林水産部総務課経理係長

昭和62年4月 総務部財政課課長補佐

平成元年4月 総務部財政課副課長

平成4年10月 総務部財政課参事

平成8年4月 土木部次長

平成11年4月 企業庁管理部長

平成12年4月 企業庁管理局长

平成13年4月 淡路県民局长

平成15年4月 兵庫県代表監査委員

神戸市西区伊川谷町潤和1425-18在住(〒651-2124)

故郷の雨

淡路島雑感

二〇〇三年四月二十五日初版第一刷発行

著者 門康彦

発行者

淡國書房(成錦堂出版部)

兵庫県洲本市本町五十二一九

〒六五六一〇五〇一

電話(〇七九九)二二一〇〇三三

製印

本刷

中西印刷株式会社